

2020 年度 入学試験問題

国 語

(第 2 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校

【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の二つの文章を読み、後の問いに答えなさい。

【I】

希望する効果達成のためには、一番無駄のない手段を用いるというやり方は、禅哲学の産物だが、これは竜安寺石庭の持つ、[※] もう一つの性格である。同じ哲学は、他にも多くの禅寺の造庭に用いられている。例えば天竜寺の枯山水、また西芳寺——通称苔寺——の緑苔の間を転げ落ちる水無しの滝など。しかし庭造りに用いられるこの簡潔さへの嗜好は、必ずしも禅寺の庭だけに限られていない。小さな池に渡す橋や、水盤に自然石を使うのは、人の手が加わっていない自然のままの石の肌理を愛する心から出ているのだらう。また人の気を散らし、小うるさいものとして、庭に花を植えることさえ軽蔑するのは、抽象的な庭の持つ、なにもない裸の骨組みのみで良しとする気持が、その底にあるからだらう。生垣のような、それこそ取ってつけたような魅力や、「色の大安売」のような花壇などは、全く無用というわけだ。簡潔さと、自然の素材を生かすことを初めて強調したのは、おそらく禅僧たちであったにちがいない。しかしそれは、今や日本人の共通の理想になっている。ソーパーの指摘によると、「その起源がどうにもはつきりしない禅建築の一特質は、しばしば建物に、一切彩色がなされていないことだ。内部も外部も、いずれも白木のままである。こうした キビシイ簡潔さは、明らかに非中国的なものである。おそらく、禅の教義に固有の簡潔を好む精神にならって（中略）日本の初期禅僧が、意図的に選んだことの証左にちがいない」。日本でも、初期の仏教寺院は、通常（今日でも平等院で見られるように）鈍い朱色に塗られていた。だが十三世紀以後は、宗派を問わず、大抵の寺院は、白木を用いるようになった。そして他の建築物、あるいは個人の家屋も、それに倣ったのである。

人の住む家は簡素なほどよろしい、という兼好法師の意見は、大抵の日本人に共有される意見となった。「おほくの工の心をつくしてみがきたて、唐の、大和の、めづらしく、えならぬ（得がたい）調度どもならべおき、前栽（草木を植え込んだ庭）の草木まで心のま、ならず作りなせるは、見る目もくるしく、いとわびし」（『徒然草』第一〇段）。兼好のこの意見は、五十年前の西洋の作家よりも、今日の私たちのほうに、もっとしっくり来るのである。今日 日本人の美意識について書くほどの人間ならば、銀閣寺について説明するのに、サンソム（訳註・ジョージ・サンソム卿。一八八三—一九六五。イギリスの外交官。日本歴史家）の次のような言い方はしないであろう。「銀閣寺——その名を裏切る、まことに取るに足りぬ建造物。（中略）際どいところで

X 乾燥になるぐらい単純である」。私には、銀閣寺が「取るに足りぬ建造物」のようにはどうしても思えない。どちらを取るかと言われれば、私は勿論あのごてごてした日光の東照宮よりも、こちらのほうを取る。そして他の日本を学ぶ学者たちも、大抵の人が、私の意見に同意してくれると思う。しかし西洋では、伝統的に、「おほくの工の心をつくしてみがきたて」たる家が、最も

望ましい、とずっと考えられていたのである。古い写真を見れば分かるように、金持の家の応接間は、普通高価な宝物が溢れかえり、足の踏み場もなかったのである。そして木々や草までが、不自然に刈り込まれている庭が、ヨーロッパの大邸宅を訪れる人々を、いまだに惹きつけている。控え目な表現が生み出す優雅さを愛する日本人の心が、最も極端に表われているのは、多分茶の湯であろう。偉大な茶の宗匠千利休（一五二―一九二）が追求した理想は、「さび」であり、これは「鏽」にも、また「寂れる」にも通じる言葉であった。これは美的理想としてはいささか奇妙な理想のように思えるかもしれない。だがそれは、利休の主君であり、当時日本のドクサイ者でもあった豊臣秀吉の、いわば成上り者的豪奢さへの反動として出て来たものでもあったのだ。なにしろ秀吉というのは、純金のポーター茶室を作らせて、それがあまりにも気に入ったので、行くところへは必ず持って行ったという人物である。利休の「さび」は、資力乏しいがゆえにそうせざるを得なかった人間の簡素とは、わけがちがっていた。そうではなく、簡単に得られる贅沢を拒否する心、黄金色に輝く新しい茶釜よりは、物寂びた小屋を賞でる心に、それは通じていた。といってこれは、羊飼女の真似事をしていたフランスの王妃マリー・アントワネットともちがっていた。事実それは、もともと日本人に具わっていた普通の意味の単純を愛する心に戻ったことであって、絶対に気取りではなかった。「さび」が受け入れられたのは、日本人の心の奥底にあった美的信念と、それがたまたま一致したからだったのだ。今日の茶の湯は、それがかつて具現した理想の墮落だとして、時に攻撃されることもある。しかしあらゆる飾りを排除した単純さに到達するために大金をかけるというのは、正真正銘日本の伝統なのである。

（ドナルド・キーン『日本人の美意識』より）

II

千利休の朝顔をめぐるエピソードは、比較的よく知られた話であろう。利休は珍しい種類の朝顔を栽培して評判を呼んでいた。その評判を聞いた秀吉が実際に朝顔を見てみたいと望んだので、利休は秀吉を自分の邸に招く。ところがその当日の朝、^②利休は庭に咲いていた朝顔の花を全部摘み取らせてしまった。やって来た秀吉は、期待を裏切られて、当然不機嫌になる。しかしかわらの茶室に招じ入れられると、その床の間に一輪、見事な朝顔が活けられていた。それを見て秀吉は A 満足したという。

このエピソードに、美に対する利休の考えがよく示されている。庭一面に咲いた朝顔の花も、むろんそれなりに魅力的な光景であろう。しかし利休は、その美しさを B 犠牲にして、床の間のただ一点にすべてを凝縮させた。一輪の花の美しさを際立たせるためには、それ以外の花の存在は不要である。いやそれどころか邪魔になるとさえ言えるかもしれない。邪魔なもの、余計なものを切り捨てるところに利休の美は成立する。

だが庭の花を摘み取らせたことの意味は、余計なものの排除という点にだけ尽きるものではない。花のない庭というのは、それ自体美の世界を構成する重要な役割を持っている。期待に満ち

てやって来た秀吉は、一輪の花もない庭を見て失望し、不満を覚えたであろう。茶室に入ったときも、その不満は続いていたはずである。そのような状態で床の間の花と対面したとすれば、何もなしに直接花と向き合ったときと較べて、不満があった分だけ驚きは大きく、印象もそれだけ強烈なものとなったであろう。利休はそこまで計算していたのではなかったらうか。

つまり床の間の花は、庭の花の不在によっていつそう引き立てられる。このような美の世界を仮りに一幅の絵画に仕立てるとすれば、画面の中央に花を置くだけでは不十分であり、一方に花が、そして他方に何もない空間が広がるという構図になるであろう。日本の水墨画における余白と呼ばれるものが、**C** そのような空間である。

この「余白」という言葉は、英語やフランス語には訳しにくい。西洋の油絵では、風景画でも静物画でも、画面は隅々まで塗られるのが本来であり、何も描かれていない部分があるとすれば、それは単に未完成に過ぎないからである。だが例えば長谷川等伯の《松林図》においては、強い筆づかいの濃墨の松や霏のなかに消えて行くような薄墨の松が作り出す樹木の群のあいだに、何もない空間が置かれることによって画面にシンピ的な奥行きが生じ、空間自体にも幽遠な雰囲気が漂う。また、大徳寺の方丈に探幽が描いた《山水図》では、何もない広々とした余白の空間が、**D** 画面の主役であるかのように見る者に迫って来る。

もともと余計なもの、二義的なものを一切排除するというのは、日本の美意識の一つの大きな特色である。京都御所の紫宸殿の庭は、^③西欧の宮殿庭園に見られるような花壇や彫像や噴水はまったたくなく、ただ一面に白い砂礫を敷きつめただけの清浄な空間であり、あらゆる装飾や彩色を拒否した簡素な白木造りの伊勢神宮は、今日に至るまでもそのままのかたちで受け継がれ、生き続けている。伊勢神宮の式年造替（遷宮）が始まったのは紀元七世紀後半のこととされており、建物の原型もほぼその頃に成立したと考えられているが、当時日本にはすでに、大陸からもたらされた仏教が一世紀以上の歴史を経て定着しており、それにもなつて「青丹よし奈良の都」と言われる通り、多彩な仏教寺院建築も、奈良をはじめ日本の各地に建てられていた。仏教寺院の場合、建築工法も、柱を礎石の上に置き、屋根は瓦葺きという進んだやり方で、掘立柱、萱葺きの伊勢神宮より、保存性もはるかに高い（それゆえに、伊勢神宮は二十年ごとの建て替えが必要となる）。伊勢神宮でも、周囲にめぐらされた高欄の部分などに仏教建築の影響が認められるから、そのゾウエイにあたった工匠たちが大陸渡来の新技術を知らなかったわけではない。だがそれにもかかわらず、日本人は敢えて古い、簡素な様式を選び取り、しかもそれを千三百年以上にわたって保ち続けた。そこには、余計なものを拒否するという美意識——信仰と深く結びついた美意識——が一貫して流れていると言つてよいであろう。

（高階秀爾『日本人にとって美しさとは何か』より）

※もう一つの性格……この文章の前に別の性格が述べられています。

問1 ——線 a、d のカタカナを漢字に直しなさい。なお、送りがないものはその送りがなをふくめて答えなさい。

問2 空らん X に漢字二字を入れて「おもしろみも風情ふぜいもないこと」を意味する四字熟語を完成させなさい。

問3 空らん A、D にあてはまることばを次から一つずつ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|---------|---------|---------|---------|
| A | 1 少しも | 2 そっくり | 3 あしからず | 4 大いに |
| B | 1 すべからく | 2 敢えて | 3 はや | 4 おもむろに |
| C | 1 あいにく | 2 わずかに | 3 まさしく | 4 ひもすがら |
| D | 1 つぶさに | 2 いづくんぞ | 3 あたかも | 4 しきりに |

問4 ——線①「日本人の美意識」とありますが、【I】の文章で筆者が伝えたい「日本人の美意識」があらわれているものを次からすべて選び、番号で答えなさい。

- 1 天竜寺の枯山水
- 2 銀閣寺
- 3 日光の東照宮
- 4 純金のポータブル茶室

問5 ——線②「利休は庭に咲いていた朝顔の花を全部摘み取らしてしまった」とありますが、この利休の行動を筆者はどのように考えていますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 庭の花をすべて摘み取り、花のない空間を意図的に作ることで、茶室の中に活けられている一輪の花と対面した際の印象を強くしたと考えている。
- 2 本来庭にあるべき他の種類の花をすべて排除することで、特定の花を他の花よりも目立たせたと考えている。
- 3 鑑賞者かんしょうしゃの視点を全く意識しないで、水墨画の花のように全体の中の一部として花を表現したと考えている。
- 4 茶室の外の空間に何もない状態を作ること、どこに花があるのかという鑑賞者の好奇心を最大に引き立てたと考えている。

(問題は次のページに続く)

② 次の文章は芥川龍之介の小説「たね子の憂鬱」のほぼ全文です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

たね子は夫の先輩に当るある実業家の令嬢の結婚披露式の通知を貰った時、ちよūdど勤め先へ出かかった夫にこう熱心に話しかけた。

「あたしも出なければ悪いでしょうか？」

「それは悪いさ」

夫はタイを結びながら、鏡の中のたね子に返事をした。もつともそれは箆筒の上に立てた鏡に映っていた関係上、たね子よりもむしろたね子の眉に返事をした——のに近いものだった。

「だって帝国ホテルでやるんでしょう？」

「帝国ホテル——か？」

「あら、ご存知なかったの？」

「うん、……おい、チョッキ！」

たね子は急いでチョッキをとり上げ、もう一度この披露式の話をし出した。

「帝国ホテルじゃ洋食でしょう？」

「当り前なことを言っている」

「それだからあたしは困ってしまう」

「なぜ？」

「なぜって……あたしは洋食の食べかたを一度も教わったことはないんですもの」

「誰でも教わったり何かするものか！……」

夫は上着をひっかけるが早いか、無造作に春の中折帽をかぶった。それからちよūdど箆筒の上の披露式の通知に目を通し「なんだ、四月の十六日じゃないか？」と言った。

「そりゃ十六日だって十七日だって……」

「だからさ、まだ三日もある。そのうちに稽古をしると言うんだ」

「じゃあなた、あしたの日曜にでもきつとどこかへつれて行って下さる！」

① しかし夫はなんとも言わずにさっさと会社へ出て行ってしまった。たね子は夫を見送りながら、ちよūdど憂鬱にならずにはいられなかった。それは彼女の体の具合も手伝っていたことは確かだった。子供のない彼女はひとりになると、長火鉢の前の新聞をとり上げ、何かそういう記事はないかと一々欄外へも目を通した。が、「今日の献立て」はあっても、洋食の食べかたなどというものはなかった。洋食の食べかたなどというものは？——彼女はふと女学校の教科書にそんなことも書いてあったように感じ、早速用箆筒の抽斗から古い家政読本を二冊出した。それ等の本はいつの間にか手ずれの痕さえ煤けていた。のみならずまた争われない過去の匂いを放っていた。たね子は細い膝の上にそれ等の本を開いたまま、どういふ小説を読む時よりも一生懸命に目次を辿っていた。

「木綿および麻織物洗濯。ハンケチ、前掛、足袋、食卓掛、ナプキン、レエス、……」

「敷物。畳、絨毯、リノリウム、コオクカアペト……」

「台所用具。陶磁器類、硝子器類、金銀製器具……」

一冊の本に失望したたね子はもう一冊の本を検べ出した。

「繙帯法。巻軸帯、繙帯巾、……」

「出産。生児の衣服、産室、産具……」

「収入及び支出。労銀、利子、企業所得……」

「一家の管理。家風、主婦の心得、勤勉と節儉、交際、趣味、……」

② たね子はがっかりして本を投げ出し、大きい櫛の鏡台の前へ髪を結いに立って行った。が、洋食の食べかただけはどうしても気にかかってならなかった。……

その次の午後、夫はたね子の心配を見かね、わざわざ彼女を銀座の裏のあるレストオランへつれて行った。たね子はテエブルに向かいながら、まずそこには彼等以外に誰もいないのに安心した。しかしこの店もはやらないのかと思うと、^③ 夫のボオナスにも影響した不景気を感じずにはいられなかった。

「気の毒だわね、こんなにお客がなくなつては」

※ 常談言っちゃいけない。こつちはお客のない時間を選つて来たんだ」

それから夫はナイフやフォオクをとり上げ、洋食の食べかたを教え出した。それもまた実は必ずしも確かではないのに違ひなかった。が、彼はアスパラガスに一々ナイフを入れながら、とにかくたね子を教えるのに彼の全智識を傾けていた。彼女も勿論熱心だった。しかし最後にオレンジだのバナナだの出て来た時にはおのずからこういう果物の値段を考えない訣には行かなかった。

彼等はこのレストオランをあとに銀座の裏を歩いて行った。夫はやつと義務を果した満足を感じているらしかった。が、たね子は心の中に何度もフォオクの使いかたのカップエの飲みかただのと思ひ返していた。のみならず万一間違つた時には——という病的な不安も感じていた。銀座の裏は静かだった。アスファルトの上へ落ちた日あしもやはり静かに春めかしかつた。しかし^④ たね子は夫の言葉に好い加減な返事を与えながら、遅れがちに足を運んでいた。……

帝国ホテルの中へはいるのは勿論彼女には始めてだった。たね子は紋服を着た夫の前に狭い階段を登りながら、大谷石や煉瓦を用いた内部に何か無気味に近いものを感じた。のみならず壁を伝わって走る、^⑤ 大きい一匹の鼠さえ感じた。感じた？——それは実際「感じた」だった。彼女は夫の袂を引き、「あら、あなた、鼠が」と言った。が、夫はふり返ると、ちよつと当惑らしい表情を浮べ、「どこに？……気のせいだよ」と答えたばかりだった。たね子は夫にこう言われぬ前にも彼女の錯覚に気づいていた。しかし気づいていればいるだけですます彼女の神経にこだわらない訣には行かなかつた。

彼等はテエブルの隅に座り、ナイフやフォオクを動かし出した。たね子は角隠しをかけた花嫁

にも時々目を注いでいた。が、それよりも気がかりだったのは勿論皿の上の料理だった。彼女はパンを口へ入れるのにも体中の神経の震えるのを感じた。ましてナイフを落した時には途方に暮れるよりほかはなかった。けれども晩餐は幸いにも 徐ろに最後に近づいていった。たね子は皿の上のサラダを見た時、「サラダのついたものが出て来た時には食事もおしまいなったと思え」という夫の言葉を思い出した。しかしやっとひと息ついたと思うと、今度は三鞭酒の杯を挙げて立ち上がらなければならなかった。それはこの晩餐の中でも最も苦しい何分かだった。彼女は 怯ず怯ず椅子を離れ、目八分に杯をさし上げたまま、いつか背骨さえ震え出したのを感じた。

彼等はある電車の終点から細い横町を曲って行った。夫はかなり酔っているらしかった。たね子は夫の足もとに気をつけながらはしゃぎ気味に何かと口を利いたりした。そのうちに彼等は電灯の明るい「食堂」の前へ通りかかった。そこにはシャツ一枚の男が一人「食堂」の女中とぶざけながら、章魚を肴に酒を飲んでた。それは勿論彼女の目にはちらりと見えたばかりだった。が、彼女はこの男を、——この無精髭を伸ばした男を 軽蔑しない訣には行かなかった。同時にまた自然と彼の自由を羨まない訣にも行かなかった。この「食堂」を通り越した後はじきに、しもた家ばかりになった。従ってあたりも暗くなりはじめた。たね子はこういう夜の中に何か木の芽の匂うのを感じ、いつかしみじみと彼女の生まれた田舎のことを思い出していた。

※常談……「冗談」と同じ。

※しもた家……元々は商店をしていたが、今はやめた家。

問1 ……線ア「徐ろに」、イ「怯ず怯ず」の意味として最もふさわしいものを次から一つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

ア 「徐ろに」

- | | | | |
|---|----------|---|-------|
| 1 | 大きな事故もなく | 2 | 期待通りに |
| 3 | あつという間に | 4 | ゆっくりと |

イ 「怯ず怯ず」

- | | | | |
|---|-----------|---|---------|
| 1 | 細心の注意を払って | 2 | あつさり |
| 3 | ためらいながら | 4 | 無意識のうちに |

問5 ——線④「たね子は夫の言葉に好い加減な返事を与えながら、遅れがちに足を運んでいた」とありますが、この時のたね子について説明したのとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 夫に教えてもらった洋食の食べ方を、結婚披露式本番でもうまくできるか考えると気がでなく、どこか上の空になっている。
- 2 店を出た後も洋食の食べ方を確認するたね子とは対照的に、教えるだけ教えて満足そうにしている夫に愛想を尽かしている。
- 3 洋食の食べ方を事前に教えてもらったことで抱えていた不安もやわらぎ、うららかな春の陽気を感じる心の余裕ができています。
- 4 洋食の食べ方を学ぶのに必死で忘れていたが、レストランでの出費が家計に響くであろうことに気づき、足取りが重くなっている。

問6 ——線⑤「大きい一匹の鼠さえ感じた」とありますが、このように感じているたね子について説明したものとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 普段来ることがない高級ホテルに初めて足を踏み入れたことで、言いようのない居心地の悪さを覚えるとともに、いよいよ洋食を食べる時が近づいてきたことを感じ、神経を高ぶらせている。
- 2 夫の後ろ姿しか見えないまま狭い階段を登っていくことで、不安な気持ちをかきたたせられるとともに、高級なホテルにふさわしくない鼠を目撃してしまったことを不吉だと感じている。
- 3 大谷石や煉瓦などで豪華に飾られたホテルの中で汚い鼠を見かけたことで、衝撃を受けるとともに、この後の食事にも鼠に汚染されたものが出てくるかもしれないと不安に感じている。
- 4 ホテルに入って感じた無気味さを気のせいだと夫に一蹴されたことで、かすかないらだちを感じるとともに、自分の気のせいだったと受け入れることができず意固地になっている。

問7 ———線⑥「軽蔑しない訣には行かなかった」とありますが、この時のたね子について説明したものと最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

1 少し前まで一流のホテルにいたことで、豪華できらびやかなものへの憧れに心が浮き立っており、シャツ一枚で無精髭を伸ばしたままの汚らしい姿の男を毛嫌いしている。

2 不安に感じていたホテルでの晚餐を無事に終えた今、安心すると同時に誇らしさを感じており、たね子とは対照的に食事のマナーや周囲の目など気にせずふるまう男を見下している。

3 慣れない洋食の場でひどく神経を使ったせいで、普段は感じることもないほどの疲労を感じており、悩みなど少しも無いかのように女中とふざけあっている男を逆恨みしている。

4 豪華なホテルでの晚餐を一通りこなせたことで優越感に浸っていたが、そこで目にした食堂の男の姿に、ふと結婚披露宴以前のみすぼらしい自分の姿を重ねてあわれんでいる。

問8 本文の内容としてふさわしいものを次の1～6から二つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 結婚披露式に同席することになって困っているたね子を見かねて、夫は日曜日に銀座のレストランで洋食の食べ方を教えると約束し、会社に出かけていった。

2 夫が会社に出かけて一人になったたね子は、体調も手伝ってやや落ち込んでいたが、少しでも洋食の作法を身につけようと新聞や女学校時代の教科書を熟読した。

3 ナイフやフォークを用いながら洋食の食べ方を教えた夫は満足しながら帰り道を歩いていたが、たね子はその間もフォークの使い方やコーヒーの飲み方を思い出していた。

4 帝国ホテルの中に入った時に見えた鼠が、自分だけが見ている錯覚であることに、たね子は夫に指摘されたことでようやく気がついた。

5 披露式の最中極度に神経をとがらせながらも、何とか終わりを迎えることができたたね子は、披露式の帰り道、少し浮かれた様子で夫に話しかけた。

6 「食堂」を通り越した後、電灯が明るく照らす道を歩きながら、たね子は木の芽が匂うのを感じ、生まれ故郷を懐かしんでいた。

3 次の詩A・Bを読み、後の問いに答えなさい。

【詩A】

飛込

花のように雲たちの衣裳が開く
水の反射が
あなたの裸体に縞をつける
あなたは遂に飛びだした
筋肉の翅で
日に焦げた小さい蜂よ
あなたは花に向って落ち
つき刺さるようにもぐりこんだ
軀て あちらの花のかけから
あなたは出てくる
液体に濡れて
さも重たそうに

【詩B】

飛込

僕は白い雲の中から歩いてくる
一枚の距離の端まで
大きく僕は反る
時間がそこへ皺よる
蹴る 僕は蹴った
すでに空の中だ
空が僕を抱きとめる
空にかかる筋肉
だが脱落する
追われてきてつき刺さる
僕は透明な触覚の中で藻掻く
頭の上の泡の外に
女たちの笑や腰が見える
僕は赤い ※ 海岸傘の
巨い縞を掴もうとあせる

(村野四郎『体操詩集』より)

※海岸傘……ビーチパラソルのこと。

問1 二つの詩の文体と形式について、説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 今では使われない口語で書かれ、きまった慣用表現を用いない自由詩である。
- 2 今では使われない文語で書かれ、音数が一定のきまりをもつ定型詩である。
- 3 話し言葉と同じ文語で書かれ、きまった慣用表現を用いる定型詩である。
- 4 話し言葉と同じ口語で書かれ、音数に一定の決まりのない自由詩である。
- 5 話し言葉と同じ口語で書かれ、説明文と同じように書かれた散文詩である。

問2 二つの詩に共通して使われている表現技法は何ですか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- | | | |
|----------|--------|-------|
| 1 直喩(明喩) | 2 対句法 | 3 反復法 |
| 4 倒置法 | 5 体言止め | |

問3 二つの詩は高飛び込みの場面を描いた詩です。詩Aで、描かれた人物がスポーツ選手であることがわかるのはどの部分ですか。最もよく表している一行をぬき出しなさい。

問4 詩Bは飛び込む様子を特徴的に描いています。その中で時間が一瞬止まったかのように擬人法を使って表現しているのはどの部分ですか。その一行をぬき出しなさい。

問5 次の文章は、詩A・Bについて話し合う二人の会話です。空らん [ア] [エ] にはAもしくはBが入ります。組み合わせの順として最もふさわしいものをあとの1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

あずまくん この詩集はもともと一九三九年に出されたものなんだ。スポーツをテーマにした詩集ということで、珍しがられたそうだよ。しかも、一九三六年のベルリン・オリンピックで撮られた写真と組み合わせさせて作品にしたんだって。

みやこさん 昭和の初めに今のテレビ映像みたいな描写をしているのはすごいよね。

あずまくん 時間的・空間的な描写もすごいけど、選手のからだの存在感も伝わってくるね。ところで、どちらも同じ題材とタイトルだけど、どっちが好きかな。

みやこさん どちらも素敵だけど、詩 [ア] のほうがより写真的というか、選手を対象として観察しているように見えるわ。詩 [イ] は飛び込んだ選手の感覚が直接伝わってくるようなね。

あずまくん たしかによく読むと、そういう違いがあるね。詩 [ウ] は競技の緊張感が好き間なく描かれているようで、詩 [エ] は緊張の後の場面がちょっとユーモラスにも感じられるよ。本人はそれどころではないと思うけど。

みやこさん 同じスポーツもいろいろな見方ができるのね。今年のオリンピックは飛び込み競技にも注目したいわ。それにしても、昔は飛び込み会場にピーチパラソルを持ちこんでいたのかしら。それとも、海でやっていたとか？

- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 B A A B | 2 A B A B |
| 3 A B B A | 4 B A B A |

4 ①～⑦について、次の問いに答えなさい。

(1) それぞれの説明にあてはまることばを答えなさい。ただし、答えは法則に合うように、ひらがなで空らんを埋めるものとします。

①非常に。まったく。すっかり。

②力なく歩くさま。

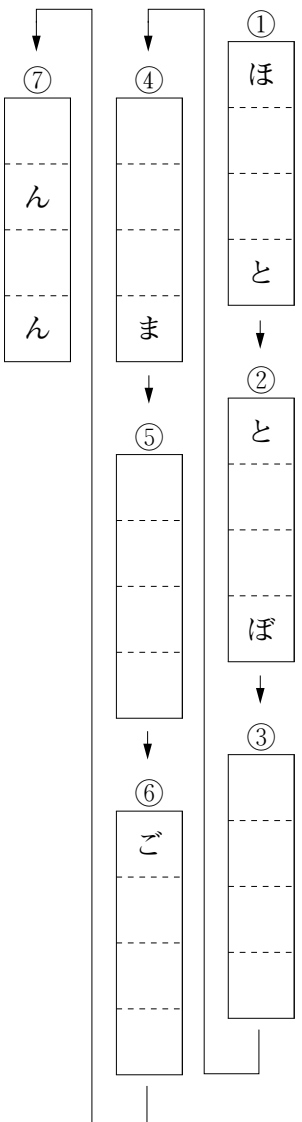
③少しずつ進行するようす。ゆつくりと物事にとりかかるようす。

④小さくまとまっているようす。

⑤どうしてよいかわからずうろろするようす。

⑥もめごと。多くのものが入りまじって混乱するさま。

⑦あっさりしているさま。平静で物事にこだわらないさま。



(2) ⑤の「どうしてよいかわからずうろろするようす」を四字熟語で表すとどうなりますか。漢字で答えなさい。なお、二文字目と四文字目は同じ漢字が入ります。

